
THANK YOU,
WORLD

第二部

敷居 11

世界よ、ありがとう

私がこれらの敷居の終わりに辿り着いたのは、人生で多くの場所に辿り着いたのと同じ仕方でだった。

完璧な地図に従ってではなく。

一本の糸を辿って。

ときに目に見える。

ときに目に見えない。

ときに私を導けるほど強い。

ときに一つの記憶のように細い。

この道のりを始めたとき、私は一つのサーガを築いてはいなかった。

一つの体系を設計してはいなかった。

一つの痕跡を残そうとしてはいなかった。

私はただ、理解しようとしていた。

なぜある人々が私たちの内に生き続けるのかを、理解しようと。

なぜある経験が私たちを離れないのかを、理解しようと。

なぜある傷が教えになるのかを、理解しようと。

なぜ時間は多くのものを奪い去るが、すべてではないのかを、理解しようと。

あなたが越えてきた一つ一つの敷居は、この探求の一部を語っている。

一つの理論ではない。

一つの哲学ではない。

一つの探求だ。

なぜなら人生は、私に決定的な真実を一度も手渡さなかったからだ。

人生が私に手渡したのは出会いだった。

人々。

責任。

喪失。

旅。

病。

再生。

そしてそのそれぞれから、私は一つの意味を引き出そうとした。

いつも成功したわけではない。

だが私は試み続けた。

年を重ねるにつれ、私は「残った人々」が一つのブランドから生まれるのではないと理解した。

一つの会社から生まれるのではない。

一つの家族からすら生まれるのではない。

それは一つの問いから生まれる。

一つの人生は、いかにして時代、国、文化、そして人々を通り抜けながら、自らの同一性を失わずにいられるのか。

答えを、私は成果のなかには見いださなかった。

私はそれを関係のなかに見いだした。

なぜなら、あらゆる人間は一つの対話の産物だからだ。

誰も独りで自らを築くことはない。

誰も独りで育つことはない。

誰も独りで自らを救うことはない。

あらゆる道のりの背後には、目に見えない多くの人々が存在する。

そしてここまで来て、私はついにその人々を認めたい。

私の歩みに痕跡を残したすべての人々に感謝したい。

残ってくれた人々に。

そして、道のほんの一区間だけを通り過ぎていった人々に。

私に教えてくれた人々に。

そして私を試した人々に。

私を愛してくれた人々に。

そして私に異を唱えた人々に。

私に機会を与えてくれた人々に。

そして、それを自分の手でつくり出すことを教えてくれた人々に。

私の祖父に感謝する。

私の父に。

私の母に。

説明する必要もなく受け継がせてくれたものに対して。

私の家族に感謝する。

私と、たやすい日々だけでなく、何よりも困難な日々を分かち合ってくれたことに対して。

私の人生を通り過ぎていった女性たちに感謝する。

幾度も彼女たちは、何が起きているのかを私より先に見た。

幾度も彼女たちは、私が独りでは見えなかった一つの真実を私に返してくれた。

道のりで出会った同僚たちに感謝する。

私がそのもとで働いた人々に、そして私とともに働いてくれた人々に。

なぜなら誰もが、それぞれ異なる仕方で、私に何かを教えてくれたからだ。

私を受け入れてくれた国々に感謝する。

私を迎え入れてくれた街々に。

私に異なる視点を見せてくれた文化に。

それらは、世界が私たちの確信よりずっと広いことを思い出させてくれた。

私のそばで苦しんだ人々に感謝する。

なぜなら、分かち合われた痛みは、成功の知らない教えを授けるからだ。

去っていった人々にも感謝する。

彼らの不在は、存在と同じくらい、今の私という人間を形づくった。

試練に感謝する。

転落に。

病に。

失敗に。

恐れに。

苦しい夜に。

答えのない問いに。

なぜなら、何かが壊れるたびに、より本物の何かが現れたからだ。

今日、私はもう、一つの人生が勝ち取るものによって測られるとは思わない。

それは、受け継がせるものによって測られると思う。

他者のなかに遺すものによって。

可能にするものによって。

その作者がもはや舞台の中心にいなくなったときにも、なお生き続けるものによって。

私が今の私になったのは、ただ一つの決断のおかげではない。

ただ一つの資質のおかげではない。

ただ一人の人間のおかげではない。

それは幾千もの寄与の結果だ。

出会いの。

振る舞いの。

言葉の。

手本の。

存在の。

この作品は私の名を冠している。

だが、それは私だけのものではない。

それは、意識してかせずか、道すがら刻印を残したすべての人々のものでもある。

おそらくこれこそ、「残った人々」の最終的な意味だ。

一つの物語ではなく、一つの認識だ。

あらゆる人間が集団的な構築物であるという認識。

関係の総和。

影響の地理。

動き続ける一つの記憶。

そしてもし、これらのページのなかに、あなた自身に属する何かを見つけたのなら、この物語はもはや私だけのものではない。

それは少し、あなたのものにもなったのだ。

だから私は別れの言葉で締めくくらない。

私は感謝で締めくくる。

私が今の私になる手助けをしてくれたすべての人々に。

私のそばを歩いてくれたすべての人々に。

そして、旅を続けていくすべての人々に。